薬史学会通信

〒113
東京都文京区本郷7-2-2
(財)学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

No. 16　1992年10月

日本薬史学会集談会お知らせ

第1回　ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅　報告会

と　　き	平成4年11月28日(土)　14:00～
と　こ　ろ	昭和大学1号館7F講堂 (東急池上線または大井町線旗の台駅下車5分)
フォーラム	ロンドン，パリの医薬史蹟を訪ねる旅 報告会 司会　(東京理大・薬)山川　浩司　氏
参　加　費	無料　会員外の薬剤師，大学院生，学生の来聴も歓迎
連　絡　先	〒113　文京区本郷7－2－2　(財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局　TEL (03) 3817-5825 内線 121

―― 日本薬史学会西部支部講演会のお知らせ ――

と　　き	平成5年1月19日(火)　14:00～17:00
と　こ　ろ	大阪薬業クラブ　5F 〒541　大阪市中央区伏見町2－4－6 TEL (06) 202-5633
講　　演	「舎密局について」 (大阪大学名誉教授)芝　哲夫　氏 「道修町古文書の調査について」 (大阪城天主閣主任)渡辺　武　氏
問合わせ先	大阪大学薬学部(〒556　吹田市山田丘1－6) 米田　該典　TEL (06) 877-5111 内線 6146

第1回　ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅 報告会

日本薬史学会創立40周年（1994）を迎えるにあたり，近代薬学発祥の地ヨーロッパにおける史蹟を訪ねる旅として本年度はロンドン，パリへの旅を下記の如く行った。参加会員が分担執筆した印象記を掲載する。

5月23日(土)　成田発　ロンドン着
5月24日(日)　市内見物
5月25日(月)　午前　大英博物館見学，その前後にセント・メリー病院その他を参観
午後　科学博物館内のウエルカム医学史博物館見学
5月26日(火)　午前　チェルシー薬用植物園見学
午後　大英薬学会博物館見学
5月27日(水)　午前　ロンドンよりパリへ移動
午後　パスツール研究所博物館見学
5月28日(木)　午前　市内見物後
午後　オテル・デューウ訪問，見学後，レセプションの席上，フランス薬史学会会長 Jean Flahaut 先生と歓談，病院博物館見学
5月29日(金)　午前　パリ大学薬学部博物館およびモアッサン教授記念室の見学
午後　植物園，サルペトリエ病院構内を散策後，ノートルダム大寺院，ルーブル博物館見学
5月30日(土)　午前　自由行動
午後　ロンドン経由帰国の途に
5月31日(日)　成田着解散

ウエルカム医学史博物館見学記

岩井鑛次郎

約2時間の予定でウエルカム医学史博物館へ入ったが，医療の発展の軌跡が豊富な資料にもとづいて興味深く展示されており，時間内には，到底見終わることができなかった。

博物館の見学には，体力と時間がいる。

この博物館は，Science Museum の4階と5階にある。Lower Gallery と称する4階には，ヨーロッパ医療発展の姿がジオラマで示されている。Upper Gallery と呼ばれる5階には，1800年以前については，地域別に，1800年以後については，医療領域別に，発展の経緯が具体的な器具などにより示されている。まとめ方も，展示の仕方も素晴らしい。

これらの中で気になったのは，麻酔について，エーテルとクロロホルムの適用は，詳しく説明されているのに，華岡青州の通仙散について，全く述べられていなかったことである。現代の麻酔術に影響を与えなかったからなのか？或いは知られていないからなのか？このことを確認することも，私達の任務と思った。

ウエルカム医学史博物館と東洋医学

庄司　良文

東西両医学の異質性といった点に興味を持つ私にとっては，ウェルカム医学史博物館の見学がとても有意義に感じられた。

「Oriental Medicine」としては中国・チベット・日本・インド・スリランカの伝統医学の展示コーナーがある。東西両医学の相違，とひとくちに言っても極めて繁雑であるが，英国に東洋医学がどのようなカタチで紹介されているかは極めて興味深いことに思える。

伝統的中国医学のコーナーでは，Chinese Pharmacy として本草学，鍼灸術に関する診断法として脉診が比較的詳しく紹介されている。また，そのような具体的な治療法に関することのみならず，それらの背景となる考え方としての陰陽(Yin and Yang)，気（Chhi）についても簡単に解説されている。例えば，"生体の中の陰陽は，血（陰）と気（陽）の二種の循環システムとして説明され，気は生命活動のエネルギーとなるものである" 云々と述べられている。

日本における医学の歴史のコーナーでは，漢方（Kampo；the traditional medicine of Japan）が中国より移入された，といった記載で始まり，杉田玄白の『解体新書』が高く評価され，"西洋医学の教育が1870年より採用された"と紹介されている。

その他，Childbirth in Japanのパネルでは賀川玄悦の『産論』が取りあげられ，また，三里などに灸をすえている婦人の図が展示されている。ただこのコーナーにNetsuke（根付け）の説明とその彫刻物があったのは，いささか奇異に感じられた。

医学史博物館の全体から見ると，たった5コマの日本医学の紹介であったが，とてもおもしろく見学できた。

Chelsea Physic Gardenを訪ねて

渡辺　謹三

ロンドンの西南部，文化人や知識人に好まれた住宅街，Chelsea（チェルシー）のテームズ川畔，レンガの塀に囲まれた金持ちの屋敷，入口は屋敷の勝手口といったところだろうか。これが，1673年にSociety of Apotecariesによって作られた，Chelsea Physic Gardenの外観で，ヨーロッパで最も古い植物園の一つである。英国薬剤師会(Royal Pharmaceutical Society of Great Britain, 1841年創立）と較べても歴史の長さが窺い知れる。

内部は植物達が自由に育った雰囲気ながらも，よく整備された薬草園で，ほかにHistorical Walkというイギリスの著名な博物学者によって持ち込まれた植物の区画がある。

訪れた日は，ロンドンの各所で見かけたジギタリスがここでもひときわ立派な花を咲かせ，魔女伝説をはじめ数々の逸話を持つマンドラゴラが，『悪魔のリンゴ』と呼ばれる実を付けていたのが印象的であった。また，ハーブの区画に三つ葉などの日本の野菜類が植えられ紹介されていたのが興味を引いた。

Royal Pharmaceutical Society of Great Britainを訪ねて

黒澤　嘉幸

協会はテムズ川をはさんで，国会議事堂の向い側にある。

私達が最初に案内されたのは展示室であった。そこには数世紀にわたる調剤，製剤の用具がならび，この技能の伝統の重さを感じさせた。我々の一人が容器に焼付けられた紋章に関し質問をした。案内者は胸を張って答えた。それは協会の紋章ですと。紋章は識別と敬意の象徴である。その回答に私は英国薬剤師の職能の社会的ステイタスを想像できた。

次に見たのはDIである。4万冊の蔵書を持って活動しているという。患者に直接触れる調剤薬局にとって必須のものである。患者の問いに答え信頼をかちうるには医学，薬学を駆使できねばならない。このためにはDIは重要である。協会は全力をあげて実行しているという。医薬分業における薬剤師とはこれなんだなということを実感した一日だった。

Pasteur研究所の博物館

松波　紀子

5月27日，芸術の都パリの中に，石と煉瓦の静かな建物が有り屋根の時計が4時を指していた。芝生には少年と狂犬の像があった。中は画廊のように絵が多く，実験台の上の厚い本に左肘をかけ気密容器の中を見つめるルイ・パスツールの肖像画から「自然発生説の検討と発酵現象の研究は，内面交渉を保ってこそ発展したのだ。発酵は生きている……」と聞こえてきそうだった。

測角器，白鳥フラスコ，細菌培養器の蓋，葡萄酒研究器具，蚕に関する器具，真空ポンプ，銅製顕微鏡等。哲学や思想，因襲や臆断からの解放。プーシェとの論争。リスターの生物学的予防法へと，実験科学は希望だと語りかけた日々を偲ばせた。

所内のモザイクタイルのクリプトの中の彼の遺骸に全員で黙禱しながら，敬虔なカトリック教徒であった彼が，科学に宗教を持ち込まなかった"意志"とともに，今なお"気配"を感じたのは私だけであったろうか。

パリのHôtel-Dieuを訪ねて

末廣　雅也

古い伝統をもち今日猶お leading hospitalとしてヨーロッパの医学史書に必ず記されているHotel-Dieu（「神の館」の意）を訪れたのは5月28日（Ascensionの祝日）の午後3時であった。薬剤部長F. Chast 先生の出迎えを受けたロビーには，Recontre Franco-Japonaise HISTOIRE DE LA PHARMACIEのプラカードが立てられていた。

早速中庭から階段を昇り3階の歩廊でデュピュイトランの立像を眺めてから病棟の一室を見学した後，薬剤部内を案内された。

ノートルダム寺院に隣接するこの病院は，現在550床で年間に2万人の入院患者と20万人の外来患者を診療しているとのことだが，病人と貧困者の救済のため651年に創立されたことからも，その過去は宗教と深いかかわりがあった。

中世紀以後，臨床教育，研修の場としてアンブロアズ・パレ，ビシャー等の有名な外科医がこの病院から巣立っていった。18世紀以降はパリ大学医学部と密接な関係をもっている。

はじめは院内に薬局はなく市中のハーブを売る薬店から購入していたが，コロンブスの新大陸発見以後梅毒患者が増えてきた1495年に薬局が設置された。以来，Hôtel Dieuの薬局は長いこと他の小さい病院にも薬剤を供給していたが，1795年にそれぞれの病院が薬局をもつようになった。

見学とスライドによる説明の後，全く予期しなかったレセプションがあり，シャンパンを御馳走になった席上，フランス薬史学会会長のJ. Flahaut先生（パリ大学薬学部名誉教授）にお会いした。歓談の際に予定外のパリ大学薬学部の見学をお願いし，翌朝御案内頂いた。

「パリの病院博物館」印象記

大橋　清信

オテル・ディユ病院を辞してノートルダムの正面を過ぎて左折し，宏壮な建築を左に見ながら川沿いに進み，右折して大司教橋を渡り，左折して河岸通りを100mほど東へ行くとMusee de L'-Assistance Publique de Parisがある。案内書の「医療事業歴史博物館」では，内容を把握しかねたが，事務局より標記の題名を聞いて，成る程と感心する迂濶さである。5月28日(木)は何かの休日であったが，係の方が特別に便宜を図って下さり，1時間余も親切に案内，説明の上，最後には展示品の目録とともに署名をも頂戴した。病院の博物館という発想そのものに改めて感銘を受けた。開館は1934年の事だが，それ以前に救療施設の中央薬局が併設されていたので，多くのフェイヤンス焼の薬剤容器など数多く所蔵するようだが，休日のため，これの見学は別の機会に譲らざるを得なかった。

パリ大学薬学部を訪ねて

辰野　美紀

今回の旅では（短期間ではあるが）ウィーンと並んで18C後半～19Cにかけての医薬学の学問的中心地であったパリで，近代薬学発祥史の資料原本を手に入れることを目標として期待と不安一杯で，大学を訪ねた。二日間は，パリ南大学図書館と法学部図書館を訪ね，三日目は，フランス薬史学会会長で，パリ大学百年誌（La Faculté de Pharmacie de Paris：1882-1982)の編集責任者であられたJ. Flahaut 元パリ第五大学学長が，自ら図書館の古資料をコピーして下さり，御指導下さったことには，感激した。Flahaut先生は，また，17，18Cの著名な薬剤師達の肖像画のかざられた講堂（Salle des actes）や，薬史博物室（Musee），講義室（Amphitheater）など，学内を御案内下さった。大学のエントランスの広い廊下のギリシャ風柱の下に置かれた多数の机や，図書館でも，学生がわき目もふらずに勉強している姿に，DiplômeやDocteurをとるのにきびしい試験が課せられていることがわかった。

Henri Moissan 教授の記念室

小倉　豊

パリ大学の薬学部で，Jean Flahaut 先生のご好意により，フッ素の単離で有名なHenri Moissanの記念室をみせていただくことができた。

Moissan は1852年9月パリに生まれ，最初は植物生理学を研究し，金属酸化物やpyrophoric 鉄の研究をとおして無機化学の研究へ転換し，1884年，当時その存在は知られていたが異常な反応性をもつので単離できなかったフッ素の研究をはじめた。1886年，無水フッ化水素を用いて−50℃で最初の単離に成功し，この業績で，1906年，ノーベル化学賞の栄誉をえた。この記念室は，それらの実験装置などを陳列・保管している。

その後Moissanは，ダイアモンドの合成にも着手している。彼の無機化学の第二の仕事であり，記念室にもその実験に使ったという溶鉱炉が陳列してあったが，とてもこんな小さな炉からダイアモンドができるとはおもえなかった。どうも結果的にもダイアモンドの合成は不成功に終ったようである。

しかし，その時に与えられた高温と高い気圧は当時の最高水準であり，その自製の小さな炉で，3000℃の高温と1万気圧の高圧を加えることが出来たという。この高圧を求めてMoissanは当時出来たばかりのパリの地下鉄の電圧を利用したというエピソードもFlahaut先生の話でうかがった。

Flahaut 先生はMoissan の研究者でもあり，記念室でのその説明にも熱が入っていて，Moissanの偉業がパリ大学の財産でもあり，フランス人の誇りであることが伝わってきた。

英仏の薬学教育と薬剤師の活動について

山川　浩司

5月26日午後，私達は英国薬剤師会（Royal Pharmaceutical Society of Great Britain）を訪ねた。この会館はテムズ河の国会議事堂の対岸にあり，6階のベランダからの眺めは素晴らしい。学会の名称は日本薬学会のようであるが，実体は日本薬剤師会に厚生省の権限を付したような学会である。昨年創立150年祭を行った。

英国の薬科大学は国立15校，私立1校で年間の卒業生は約1100名である。イングランドにはそのうち11校（年間の卒業生は約700名）とのことであった。高校を卒業すると2年の専門教育を受けた後に，3年制の薬学教育を受け，卒業後1年間の実務実習（Preregistration experience）の後，英国薬剤師会に登録して薬剤師となる。国家試験は行っていないが目下検討中との事であった。ウェールズはイングランドと同じ3年制（実質ヨーロッパで最も短い5年制），スコットランドは4年制（実質6年制）教育課程である。

5月28日午後，パリのセーヌ川のシテ島にあるオテル・デュー病院，29日午前パリ大学薬学部を訪ねた。オテル・デュー病院のChast 博士とパリ大学薬学部の前学部長Flahaut 博士（錯体化学が専門）から話を聞いた。フランスの薬科大学は国立24校，年間の卒業生は約2300名である。1983年より6年制の薬学教育に変わった。6年次の1年間病院実地研修が行われる。国家試験は5年次修了後で受験できるが，受験の機会は2回限りである。

英国及びフランスともに卒業者の70％はcommunity pharmacistになり，industryに就職する者は20％であるという。日本はこれと反対だと言ったら，Chast 博士から日本の industry はパワーフルだからと皮肉られた。英仏ともにＥＣ統一へ準備をしているようであった。

医薬史蹟の旅とイギリス児童文学

奥井登美子

児童文学の世界でイギリスはすばらしい歴史をもっているが，1744年，ジョンニューベリーというロンドンの薬屋さんからはじまっていることはあまり知られていない。

デフォーの「ロビンソンクルーソー」，スフィフトの「ガリバー旅行記」，ルイスキャロルの「ふしぎの国のアリス」，ミルンの「クマのプーサン」，ポターの「ピーターラビット」，マイケルボンド

の「クマのパディントン」，トラバースの「メアリーポピンズ」，メアリノートンの「床下の小人たち」すぐれたファンタジィと日常生活のこまごました細部の描写は，イギリス児童文学ならではの楽しさである。

今回の旅行中，ロンドンのホテルはケンジントン公園の隣りであった。「ピーターパンとウェンディ」の中でウェンディの家は貧乏なくせに少々見えっ張りの株屋さんで，ケンジントン公園でナナという犬を拾って来て三人の子の乳母にするのである。私も毎朝この公園を散歩しながら，乳母がつとまるような犬はいないか，ダイアナ妃の涙は落ちていないか探したが見付からなかった。

チェルシー薬用植物園は，いまにもポターのウサギがとび出してきそうな自然風の実に美しい庭になっていて，私は，ピアスの「トムは真夜中の庭で」の絵本の絵そのものだと，感激してしまった。

ポターの家は，イギリスのすぐれた自然保護政策，ナショナルトラストの保護のおかげで，生前のまま保存されているという。いつかイギリスのナショナルトラストの現場を見て歩きたいと思う。

このたびの視察で入手した英国薬剤師会の刊行パンフレットより，同会の紋章を紹介する。左右の人物は，古代のアラビアおよびギリシャの医聖が画かれている（M. S）。

第２回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅について

当会では，創立40年記念事業の一環としてヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅を企画し，本年はイギリス・フランスを訪問しました。その詳細は本通信２～６頁に掲げた通りであります。

明年は，明治以来，昭和初期までわが国薬学の発展に大きな影響を及ぼしたドイツを訪問する予定であり，８～10日程度の日程で，ギーセン，ダルムシュタット，ミュンヘンなどの医薬史蹟を訪ねる旅を企画しております。

なお，５月上旬には，大学都市として馴染みのあるハイデルベルグで，第36回国際薬史学会議が開催されます。この国際会議の第２次サーキュラーが未着なので，詳細は次号通信でお知らせする予定ですが，概要は次のとおりです。

期　日　1993年５月３日(月)～７日(金)
場　所　ハイデルベルグ
連絡先　Professor Dr. W. - D. Müller - Jahncke Deutches Apotheken - Museum
Friedrichstr. 3
D- 6900 Heidelberg　Germany.